

## 平成二十四年度講義録要約版作成にあたり

「さいたま・水とみどりのアカデミー」二年目無事終了しました。一年目は地球・世界・国土といった大枠の自然・社会条件を中心に、二年目はその条件の中で、とくに日本人の営みの歴史を中心に学びました。

日本人は稲作民族と言われていますが、その稲作文化も近年希薄になる中で、日本人の心になぜ、いつまでも森林に対する強い思いがあるのか、不思議でした。その永年の疑問もこのアカデミーで解決しました。縄文人と弥生人が違う人種であると思ひ込んでいたから、森の民とのつながりが見えなかったのです。

同じ人種なら縄文一万年の歴史がDNAに刷り込まれていて当然でしょう。日本人は森が好きなのに、森には神が鎮まっているとさえ思っているのに、森林を生活に、農用に使わざるを得なかったのも、いつもはげ山にしてしまった。その痛みが、森林を大事にしよう、という想いに現れているのでしょうか。でも今、日本の山は豊か。植林が必要なのは熱帯雨林や途上国、ということも習いましたが……。

今でも日本の普通の食卓に並ぶのは、ご飯とおかず。ご飯はもちろん弥生文化ですが、日本人はおかずに旬の味覚を大切にします。これは縄文人が生存のために身に付けた知恵・縄文文化を引き継ぐものだそうです。また今、日本がクールと言われる理由の一つに、日本人だけが使いこなすオノマトペがあります。これも縄文一万年の自然との対話で培ったものだそうです。目の鱗でした。

また、東日本の弥生遺跡は西日本に比べて貧弱。東日本の、それも埼玉の弥生時代がよく見えず、私の歴史年表から弥生時代が抜け落ちていました。これも東日本の稲作導入が遅かったのは縄文文化が豊かだったから。リスクの高い稲作を導入する必要がなかったから。でもドブクロが飲みたくて導入した。

導入してみたら、すでに西日本では大きな古墳を造り、大和王権まで成立し、氣付いた時にはその配下に置かれていた。東日本で食べ物に恵まれ、博打なんかして、のどかに暮らしていた東日本の縄文人。慌てて従うしかなかったのでしょうか。

まだあります。日本の行事・しきたりでいつも一緒にある神社。これも神社神道は「日本の宗教文化」と習いました。自然災害が多発する日本ならではの文化かも

しれません。自然に畏怖の念を抱き、そこに神が存在すると思えば神様が喜ばれるよう神饌でもてなす。神様が喜ばれればしばらく安泰。こちらも嬉しくなって元氣が出る。でもこの先、日本文化が脆弱になると神様も弱っていくのでしょうか。

世の中情報が溢れて、何でも聞きかじってはいるのですが、だから何なんだと言われると答えに困る。だから一つひとつ、論理に基づき見ていく作業をしています。終わりのない作業かもしれませんが、一つ確たるものが見えると、芋づる式に見えてくる。その楽しみがこのアカデミーにはあります。

遠路、浦和駅前までお越しくださる先生方、そして夜間にも拘らずいつも真剣な眼差しで参加してくださる方々に感謝しています。「いや、面白いよ。会費は元がとれた」「ボケ防止。何度聞いても忘れるから何度でも話して」と言う方も。まだまだ不備な点多々ありますが、二十五年度もどうぞよろしくお願い致します。

NPO法人水のフォーラム理事長 藤原悌子